

再臨のキリストによる  
第8(17)福音書

エピファニー

—宗教と科学の和声による公現—

I

*THE GOSPEL*

*BY CHRIST OF*

*THE SECOND COMING No.8 (17)*

*EPIPHANY*

SEIDOU

正道



# 目次

序説 シンクロニシティ	
第8 福音書	3
全体の目次	4
第1章 因果律と共時性	
(1) 予備学習として	9
(2) 因果律の絶対性	11
(3) もう一つの時間	13
(4) 相対性理論と共時性理論	15
(5) 共時性を証明する現象	18
第2章 共時性とは何か	
(1) 共時性の概論をつくる	23
(2) 因果性の枠をこえて——ユング、プロゴフによる	25
(3) 共鳴しあうコスモス——引き続き、ユング、プロゴフによる	28
第3章 共時性の実例(1)——ルベドまでの道程	
(1) わが身を語る	33
(2) 70の3の年、オクトーブルの月	35
(3) 聖母子発現によるイースター	38
(4) 太陽を着た女が導いた「神の座」	40
第4章 共時性の実例(2)——超新星からの道程	
(1) マギの報せ	45
(2) 超新星とベツレヘムの星	47
(3) 二つの予言	50
(4) 総括と「重大な疑問」	52



## 序説 シンクロニシティ



## 第8 福音書

再臨のキリストによる

第8 (17) 福音書

エピファニー

——宗教と科学の和声による公現

序説 シンクロニシティ (共時性)

**共時性とは**

- ・別々のできごとが、時空間的に互いに一致し、しかも意味深い心理的連関がそこに感じられる事態を示すものとして。
- ・こころの世界と物質の世界をつなぐものとして。

アンドリュー・サミュエルズ著/山中康裕監修

『ユング心理学辞典』より

# 全体の目次

第 8 (17) 福音書  
エピファニー

序説 シンクロシティ

第 1 章

因果律と共時性

第 2 章

共時性とは何か

第 3 章

共時性の実例 (1)

——ルベドまでの道程

第 4 章

共時性の実例 (2)

——超新星からの道程

第 1 部 エピデミア

第 1 章

中性子星の合体

第 2 章

重力波の観測

第 3 章

黄金の生成の謎

第 4 章

物質界における神

第 5 章

エピデミア (到来)

第 2 部 エピファニー

第 6 章



エピファニー（公現）  
第7章  
数値化された神秘（1）  
第8章  
数値化された神秘（2）  
第9章  
一致の補正  
第10章  
科学への福音  
第11章  
有神の宇宙  
第12章  
幸福なマルス



## 第1章 因果律と共時性



## (1) 予備学習として

### 不慣れな「共時性」という概念

自分の中でも「第7」で完結したと思っていた「福音書シリーズ」である。それが、ここにきて「第8福音書」を書くことになった。しかも本書は、正確には「第8(17)福音書」という、たいそう変わったタイトルである。

これは「8」は「17」でもある、という考えの現れなのだが、この点については、本編の後半(第7章)で詳しく触れることになるだろう。ここはまだ本編にも至らない「序説」のエリアである。したがって、そのような複雑な話は、まだしない方がよい。

というよりここは、そのような事をする場では、全然ないのである。私がわざわざ、こうして「序説」なるものを設けたのは、それが「本編の内容を理解するための手助け」となるためなのだ。

これは換言すれば、本編の内容を理解するためには、どうしても読者の皆さんに、一定の「予備学習」が必要であると、私が判じたということである。

まことにそうなのである。本編に入る前に、読者には、簡単な説明によって「共時性」というものを学んでいただきたいと思う。

共時性(シンクロニシティ)——それは一種の時間的概念である。この概念のおおまかな把握が、この「序説」における、予備学習の課題である。

というのも、かかる「共時性」は、因果的、合理的な時間しか知らない人にとっては、あまりにも不慣れな時間概念であるのだ。おそらく、多くの人々にとって、見たことも聞いたこともない概念として、この「共時性」という言葉があることだろう。

### 共時性現象としてのエピファニー

そうであるならば、本書の読者にとって、これは不可避な予備学習となる。なぜなら、この第8(17)福音書で、中心的に語られることになる「エピファニー」こそは、まさしく典型的な“共時性現象”だからだ。

よって本編に入る前に、読者には共時性に対する「最低限の感受性」ばかりは、やはりどうしても養って貰わなければならない。偉そうに言って申し訳ないが、そのためにこそ、この「序説」は設けられたのである。

では、共時性を知るための糸口として、まずは共時性とは対照的な「因果律」について話をしていくことにしよう。

これは話の糸口としては、まことに相応しい。というのも、この因果律に関しては、私たちは巧まずして、既にその知識と感受性とを与えられているからだ。つまり私たちは、いつ何時であっても「因果的な時間把握」を行っているのである。

だから、共時性という新しい時間概念を吸収するまえに、この肌慣れた因果律について、まずは確認を取っておこうと思う。

## (2) 因果律の絶対性

### ニュートンの物理学

因果律とは、要するに「原因と結果の継起」である。

ある原因によって、何らかの結果が生じる。その結果が、新しい原因となって、また新しい結果を呼び寄せる。そうした思考形式によって、私たちは、時間の流れのなかに表れる「状態の変化」を認識する。

このような認識の形式を身につけることは、誰にとっても重要なことである。それは、主体が自我を確立するために、どうしても不可欠なものだからだ。

それについては「第二福音書」で詳しく触れている。読者にとっては、因果律と合理性について書かれた、座標4、座標5の叙述を参照してほしい。

この因果律によって統べられている分野は多いが、その代表格にあたるのは、自然科学であろう。その中でも、最上の有用性と権威を誇ったのが、17世紀に成立した、アイザック・ニュートンの物理学だった。

ニュートンの物理学が解明するのは、地上における物理現象ばかりではない。それは、太陽系の天体物理をも、ほとんど余さず説明づけることが出来る。

それほどにも優れた学説であり、その理論的的確であることは、現代においても何ら変わっていない。いや、的確どころか、正確無比とすら、言ってよいだろう。おそらくニュートンは、科学史最大の天才である。

### ニュートンとハレー

こうしたニュートン物理学を、一般世間に向かって紹介したのが、エドモンド・ハレーであった。

彼はニュートンよりも、14歳も年下だった。それでも裕福な家庭に生まれたハレーは、自腹を切って、ニュートンの著書『プリンキピア』を出版してあげたのだ。

そんなハレーは、新進気鋭の天文学者であり、とくに彗星（ほうき星）の軌道計算に興味を持っていた。このためハレーは、ニュートンの物理学を用いて、ある彗星の“再来”を算出してみせたのである。

つまり、かかる彗星の通り道とスピードを割り出し、「次に彗星が地球にやってくるのはいつか」まで、その答えを推定したのだ。そして、その彗星が再来するであろう年、日付、観測に適した場所、その全てを予言的に書き残した。

それから数十年が経った1758年。すでにハレーは亡くなっていたが、まさしくハレーが予言した日に、彗星はやってきた。それこそ現在「ハレー彗星」と呼ばれている天体である。

そのときの状況を見れば、ハレーの予言が、この上もなく正確無比であったのは明らかだった。そして、これと同時に、このハレーの天体予言を導出した「ニュートンの物理学」の正確無比さも、また明白になったのだった。

実際、正確無比でなければ、天体の再来日や、観測すべき場所が、割り出せるはずがない。しかも、それが76年も姿を見せなかった彗星相手だったのだから、なおさらである。

やや皮肉な話になるが、難しい科学理論までは分らない民衆にとって、その正確な予言力は、むしろ魔術的な影響力を持つことになった。

つまり人々は思ったのだ。

ニュートンの物理学を用いれば、この世に不思議なことなど何もないのではないか。そこには絶対的な力と、絶対的な価値があるのではないかと。

そして「ニュートンの物理学全体を貫くものは何か」と言えば、それはまさに、原因と結果の継起であるところの、因果律に他ならなかった。現象を「原因と結果」によって眺め、それを透徹した理論に昇華したところに、ニュートンの物理学は生まれたのだからである。

## 現代まで及ぶ影響

こうして因果的な現実把握が、ヨーロッパ知識界の主潮となっていった。いわゆる、実証主義の時代が訪れたのである。それは「自然科学絶対主義」の時代の始まりと言ってもいいし、あるいは「科学万能主義時代」の幕開けと言ってもよかった。

要するに人々は、科学的な説明、因果律を用いた説明だけを「真理」として認めるようになったのである。それは当然といえば、当然の成り行きだっただろう。

逆に、かつて人々を魅了してやまなかった宗教的奇跡などは、いまや迷信の類として、軽視されるばかりになった。そんなものは、科学的に見てあり得ない。そんなものは、因果的に説明はつかない。だから存在しない、と。

このような考え方は、現代に生きる私たちにも、いまだ甚大な影響を与えている。

それについては私たちが、少しでも自分自身を省みれば分ることだろう。たしかに私たちは、ふと気づくと、因果的に説明できないものを忌避している。あるいは黙殺することが、習いになっているのである。



### (3) もう一つの時間

#### アインシュタインの登場

しかし 20 世紀になると、科学の歴史に、かの天才アインシュタインが現れる。そして彼が引っ提げてきた「新しい物理学」によって、ニュートンの物理学の絶対性は、大きく揺らぐことになる。

ただし、アインシュタインの理論は、あまりにも難解だ。そのため彼の物理学の影響は、民衆レベルにまでは、今なお届くに至っていない。

具体的に言えば、高校生の教科書までに、相対性原理 (=アインシュタイン物理学) の内容が出てくることはない。どちらかという、一般の人々は、今なおニュートン物理学の、強い影響下にあると言えるだろう。

というより、日常的な生活を送るだけならば、人間はニュートンの物理学だけで、十分に用を足せるのである。アインシュタインの理論は、極大の宇宙を説明する時にこそ、大いに活用されるべきものなのだ。

それでも、これまで因果律を絶対視してきた人々 (古典物理学者) にとっては、アインシュタインの登場は、まさに驚天動地の出来事だった。本書では触れないが、実際の科学史では、これに量子論の「不確定性原理」が追い打ちをかけることになる。

#### 捻じ曲がる時空

そもそもニュートン物理学は、その理論展開の前提として「整然とした、微動だにしない、空間と時間」を必要としている。

それは言わば「一つの物差しで測れるような時空間」と形容してもいい。そうした整然たる世界にあってこそ、ニュートンの物理学は、すべての現象を、因果的に説明できるのである。

ところが、アインシュタインの相対性理論は、空間や時間が「捻じ曲がることがある」ことを証明してしまったのだ。

アインシュタインは、光の速さを一定不変とした。そして、その代償として、空間と時間のほうが「変化するもの」になってしまった。それこそが、空間と時間の「相対性」である。相対性理論とは、かかる「立場によって変わる時空」を論じたものなのだ。

つまり、相対性理論が発動するときには、すべての主体が「一つの整然たる時空間」に立っている訳ではないのである。

たとえば、ブラックホールに吸い込まれようとしている A 氏と、地球上で過ごしている B 氏とでは、圧倒的に異なった時間を体験することになる。

なにしろ、A 氏にとっての 1 秒は、B 氏にとっての 100 年になるかもしれないのだ。ブラックホールが持っている巨大な重力は、通常の時間を、それほどにも——100 年が 1 秒になるほど——コンパクトに圧縮してしまうのである。

A 氏と B 氏が体験する時間がこうも違う。となれば、そこでは時空間が「絶対唯一のものとして測られる権利」を剥奪されてしまっている。ニュートンが必要とした「一つの物差しで測れるような時空間」は、もはやそこにはないのである。

それは「時空を測る物差しは、もはや一本では済まされない」ということでもある。物差しは、観測者の数ぶんだけ要ることになる。

そして「複数の物差し」を使って測られる時空間があるとすれば、それは間違いなく「相対的な時空間」と言えるし、ニュートン物理学からすれば「歪んでいて測りようがない時空間」に他ならないだろう。

### 真理の座の明け渡し

そのように歪んだ時空間の中では、因果律は、もはや機能不全に陥るしかない。もちろんそこでは、数学的な計算もまた、大きくズレ込んでしまうことになる。

その分かりやすい例となるのが「水星の軌道」の算出だろう。

それは、ニュートンの物理学では、どうしても値がズレてしまう。けれども、相対性理論だと、ものの見事に、現実の軌道と一致するのである。太陽がつくる巨大な重力場が、周囲の宇宙空間を歪めてしまっているからだ。

水星は、太陽から一番近いところを公転している惑星である。つまり水星は、あまりに太陽（巨大重力場）に近いところを回っているため、歪んだ空間の影響を、受けざるを得なかったのである。

そしてアインシュタインの物理学は、この“歪み”を計算式に織り込んでいる。だから、その計算式の答えは「現実の軌道」に合致するのである。

こうなってしまうと、ニュートンの物理学から、アインシュタイン物理学への「真理の座の明け渡し」が起こるのも、ごく自然な流れだった。

それに伴って因果律も、それが「世界を説明づける唯一の法則」ではなくなった。つまり現代科学における因果律は「世界の“一部”だけを説明する摂理」であることを、嫌々ながらも受け入れているのだ。

そのように、因果律では説明できないところを、アインシュタインの相対性理論や、量子物理学の不確定性理論が補う。それが現代科学の標準スタイルなのである。

## (4) 相対性理論と共時性理論

### 共通の本質

そして、こうしたアインシュタインの相対性理論を、心理学の分野に移し替えたのが、他ならぬユングの「共時性理論」だったのだ。端的に言って、共時性現象は、相対性理論と同様に「時空を捻じ曲げ、これを歪める」からである。

ユング自身、極度の共時性現象が起こるときには、「空間と時間が、ほとんどゼロにまで還元（圧縮）される。因果性は、それと共に消えてゆく」と言っている。

ごく単純に考えても、空間が無くなれば、ものの変化は起こりようがなくなる。また、時間が無くなれば、原因や結果という概念そのものが消えてしまう。

したがって、共時性現象が起こるところでは、因果律はもはや「絶対的な、事象の把握方法であること」を辞めざるを得ないのである。ユングが言っているのは、そういうことなのだ。

そのように、共時性が働いて「共時性現象」が起こるとき、その事象は「原因と結果の関係性」によってのみ、自身が説明されることを固辞するのである。まるで相対性理論が、それまで絶対だった、ニュートンの計算式に「ハズレ」を突き付けるように。

### アインシュタインとユング

こうした「相対性理論と共時性理論の同通性」は、科学史でも心理学史でも、あまり語られたことがない。

というより、私自身が、語られているのを聞いたことがない。おそらくは「寡聞にして知らない（＝持っている情報量が少ないから知らないだけ）」ということだとは思うのだが。

したがって、このようなテーマで話をすると、読者には、こじつけめいた印象さえ、与えるかもしれない。

しかし実を言えば、たしかに相対性理論と共時性理論には、歴史的接点があったのである。なぜなら、アインシュタインとユングは、若いころ、親しい友人関係にあったからである。しかも二人は、互いに「思想的な影響」を与え合っていたらしいのだ。

これについて、ユングの弟子であった、イラ・プロゴフが、次のように証言している。スイスのチューリッヒは、ユングの活動拠点であったのだが、

「ユングは、20世紀の初頭に、アインシュタインが、チューリッヒで研究していたことを、私に語ってくれた。そしてアインシュタインが、しばしばユングのもとを訪れていた、という話もしてくれた」。

プロゴフはさらに、ユングが教えてくれたという話の続きをする。

「その話によると、アインシュタインは、よくユングのもとに、昼食を取りにきていたものらしい。そして、その際に二人は、長い議論に陥ることもあったそうだ」

また、プロゴフは次のようにも付け加える。

「後期のユングは、こう思っていた。自分が発展させた共時性理論は、旧友アインシュタインが発展させた相対性理論と、対等につりあう原理であると」

### 「重力=悟り」が呼び寄せる歪み

「共時性理論は、相対性理論と、対等につりあう原理である」というユングの主張に、私もためらいなく同意することが出来る。それが当然であるぐらい、この二つの理論は、本質的な共通性を持っているからである。

それはこういうことだ。アインシュタインは、一般相対性理論によって「強い重力が、周囲の時空を捻じ曲げることがある」のを明らかにした。

そして、この「重力」を、人間の「グノーシス」と言い換えれば、それはもう共時性現象の“重要な一面”を説明したものになってしまうのである。すなわち、「高次のグノーシスは、そのグノーシスを把持した者の“周辺の時空”を捻じ曲げ、彼のもとに共時性現象を起こしやすくする」のだと。

今更ながらに説明すると、グノーシスとは靈的認識のことであり、簡単に言えば「悟り」を意味する。そして高次のグノーシスとは、錬金術的に言えば、アルベド（白化）やルベド（赤化）のことを指すことになるだろう。

よって、先の言葉を換言すれば、要するに「アルベドや、ルベドを悟得した主体の周りには、こぞって共時性現象が立ち現れる」ということである。

次章で詳しく語るが、共時性現象とは、基本的には「意味のある偶然の一致」である。よって、悟りたる者の周囲には、そのような、不可思議としか評する術のない「意味のある偶然の一致」が頻発するのである。

### 時空の圧縮点

これは、ある意味では当然のことと言えるだろう。

ぜひ「第三福音書」を思い出して頂きたいのだが、アルベドでは「現在」という“時間的虚無面”に、すべての時間が集約されていた。それが「永遠」というものの姿だった。

またルベドでは、完全な虚無の点に、存在のすべてが集約されていた。それが「無か

らの創造」たるルベドの姿だった。

つまり、高次のグノーシスを持つ者の心には、まさしく「時空がゼロにまで圧縮される箇所」が含まれているのである。もっとも、そのゼロの点は、体積がゼロでありながら、その包含しているエネルギーが無限大である「特異点」ではあるのだが。

この特異点とは、天文学の言葉としては、ブラックホールの中心や、ビッグバンの始発として想定されている点のことである。そして「特異」という言葉の意味は「科学はそれを説明する術を持たない」という告白に他ならない。つまり「説明不可能」ということだ。

それも当然で、ここには“科学そのもの”の限界が示されているのである。

すなわち、特異点の本質を知るためには、科学の次元（＝因果律の段階＝自我確立の段階）を遠く飛び越えて、宗教的真理の次元（ルベド＝時空そのものの創出）に到達しなければならないのである。

この意味では、相対性理論も量子論も、因果律の次元の束縛を、振り切っている訳ではない。

## (5) 共時性を証明する現象

### 内なるものは外なるものへ

ともあれ、アルベドやルベドといった、内的なグノーシスは、外的な「共時性現象」の呼び水にならずにはいられない。イエスも言うとおりに、内なるものは、外なるものとして、表されずにはおかれないからである（ルカ 12 章）。

このとき共時性現象の源泉となるのが「時間のすべてを集約する虚無面」や「存在のすべてを集約する虚無点」である。

それらが「長時間で隔てられている、ある時刻同士の無時間伝達」と「長距離で隔てられている、ある位置同士の、まるで無距離であるかのような伝達」という矛盾的状态を成立させる。

つまり、離れた複数のポイントを、一つに圧縮結合してしまうのだ。そうして、ここに因果律を無意味化させるほどの「共時性現象」を現出させるのである。

先にも引用したが、これをユングは、実にハッキリと言明しているのだ。共時性現象が起こるときには「空間と時間が、ほとんどゼロにまで還元（圧縮）される。因果性は、それと共に消えてゆく」と。

そのようなものの例として、最も分かりやすいのが「予言」であろう。

たとえば、ノストラダムスの予言が、現代の私によって成就されたとする。そのとき、ノストラダムスと私を隔てる「500 年ほどの時間」は、ゼロに還元される。

そして、それと同時に、ノストラダムスと私を隔てる「10000 キロほどの距離」もまた、ゼロに還元されるのである。もちろん、この 10000 キロの距離は、フランス人ノストラダムスと、日本人である私とを隔てている、地理的な距離を指している。

しかも、ノストラダムスと私の間、何らかの「因果的なつながり」があるかといえ、当然私は「あるわけがない」と言わざるを得ないのである。こうした状況ならば、それを典型的な「共時性現象」と呼んでも差支えあるまい。

### 共時性の証明

しかしながら、共時性現象が「誰にも有無を言わせぬほど、客観的なレベル」で観測されたことは、歴史上、まだ一度もないのかもしれない。この点では、ユングの共時性理論は、アインシュタインの相対性理論に、大きく水をあけられてしまっている。

というのも、相対性理論の場合は、今から100年も前から、それを証明する現象が“客観的に”観測されているからである。その最初の観測は、1919年の5月29日だった。せっかくなので、このときの様子を見てみよう。

その日、アフリカの西海岸沖にある「プリンシペ島」で皆既日食が観測された。太陽そのものではなく、太陽付近の「星の位置」を調べるためである。

一般相対性理論によれば、太陽のような大質量の星は、その重力によって、周囲の空間を歪ませることになる。そして、その歪んだ空間を通った場合、遠い星から放たれた光もまた、本来的な位置から、僅かながら「ズレる」のである。

といっても、むろん太陽と星とは、同時には観測できない。昼には星が隠れ、夜には太陽が隠れるからだ。しかし皆既日食のときだけは、昼と夜とが、同時存在するような状態となる。実際に皆既日食を見たことがある人ならば、この言葉の意味がよく分るだろう。

科学者たちはまさしく、そのような機会を狙っていたのである。

かくしてプリンシペ島では、皆既日食によって、昼間であっても、夜の如く空が暗くなった。これによって、太陽付近の星も——特殊な装置を付けたものだが——望遠鏡で映せるようになった。

すると、上述の「星の位置のズレ」が、ほぼアインシュタインの理論どおりに、観測されたのである。

これには、相対性理論が正しいという“証拠”を心待ちにしていたアインシュタインも、ホッと胸を撫でおろしたという。こうしてアインシュタインの相対性理論は、科学界における「真理」となったのである。

## 客観的な共時性現象

この1919年以降も、さまざまな形で、相対性理論の「正しさの証明」となるような現象が観測された。天体望遠鏡が進化するほどに、その証明的観測も精緻化されていった。今では、アインシュタインの理論が、真理であることを疑う人はいない。

しかし、ここで翻って、共時性理論のほうを眺めると、である。残念ながら「相対性理論に釣り合うほどの確証的データは、いまだに観測されていない」というのが実情なのだ。まことに悔しいことではあるが、今のところ、そのように言って差し支えない。

だがそれは、ある意味では仕方がないことである。

おそらくこれまでは、共時性理論における「確証的なデータを生むだけの重力」が不足していたのだ。つまり、明々白々な共時性現象を引き起こすだけの、内的なグノーシス（悟り）が、人類史に欠けていたのである。

そこで、満を持して、この私が現れたのだとも言えるだろう。私が認識した「神＝人間」というグノーシスは、人類史上においても稀有な悟りだからである。ルベド（神＝人間）とは、それほどの威力を孕んだグノーシスなのである。

そして、このルベド・グノーシスが持つ心的超重力は、きっと「きわめて明白な共時性現象」を引き起こす契機となるだろう。太陽が星の光を捻じ曲げた以上の「時空の歪

み」によって。それを予告して、次の章に移ることにしよう。



## 第2章 共時性とは何か



## (1) 共時性の概論をつくる

### 三つのテキスト

本章では「共時性そのもの」について語ってみたい。すなわち、共時性についての概論を、組み立てていきたいと思っているのだ。

ただし、第1章のように、私自らが話をするというのではない。本章においては、共時性という概念の提唱者である「ユングと、ユング派の心理学者たち」の、含蓄ぶかい言葉を羅列的に紹介してみたいのである。

テキストにするのは、まずユングの『黄金の華の秘密』と『自然現象と心の構造』の二冊。それにユングの弟子筋にあたる、イラ・プロゴフの『ユングと共時性』を加えた、合計三冊である。ここから適宜「共時性の理解に益するだろう」と思われる文章を抄出してみた。

ただし『ユングと共時性』では、巻末解説を書いている、河合隼雄氏の文章も借用したことを付け加えておく。

### 再構成上の注意

と言っても私は、彼らの文章を、ただそのまま並べた訳ではない。

たいへん僭越ではあるが、私はここで「編集」の域まで踏み込んだ。つまり、各々の抄出文を接続詞でつなぎ「まとまった文脈」として再構成させてもらったのだ。

そのさい、まるで出所が異なる文章同士を媒介するために、私自身の言葉を差し挟んだ箇所もある。申し訳ないことには、そのような私の言葉が、かなり長くなったケースもあった。もっとも、私の言葉は、本文よりも小さな活字で表記して、それと分かるようにしてはある（※1）。

だが、そればかりではない。いかにも読みづらい原文にいたっては、内容を変えない程度に、言葉を噛み砕いてしまっている。

要するに、難解な文章を、なるべく平易な表現へと、書き改めさせてもらったのだ。この処置は、かなり広範に及んでいる（※2）。

ここまですれば、確かに学問的には、僭越至極であろう。とはいえ、このような処置に至ったのも、ある意味では仕方ないことなのだ。なにせ、いま私が語りかけている対象は、深層心理学の学徒ではなく、ごくごく一般の方々なのだから。

慣れていれば、普通に読みこなせるのかもしれない。けれども、ユング派の文章というものは、初心者にとっては、どう考えても晦渋に過ぎるのだ。それこそ私がユングの著作を読んでいると、博士号を持つ友人でさえが、  
「よく、こんな意味不明な文章の意味がわかるな」

と言ってくるほどにも。したがって、ユングやユング派の文章とは、原文を、そのまま初心者に提供していいような代物では、決してないのである。そのように私は、断言することが出来る。

※1 パプーの電子書籍だとこれが出来ないので、該当部分はイタリックの活字で表記した。

※2 それでも、いわゆる「超訳」はしていない。ディスカバリー 21 で出版されている「超訳もの」と比べれば、本章の文章は、ほぼ原文のままと言ってよいレベルである。

### 曖昧な主語

むろん、ユングの聖句を汚したとして、私を責める方もあるだろう。私が今からしようとしている事は、ユング派の学徒にとっては、到底許しがたいことであろう。

しかし私にとっては、何べん自分に問いかけても、難解が生みだす誤解よりは、平易が生みだす理解のほうが、よほど好ましいのである。ゆえに、この問題に関しては、専門家筋からの寛恕を、心から請わせてもらいたい。

なお、文中には、しばしば「私は」とか「私が」といった主語が見られる。しかし、この「私」という人物を、ある個人として特定すれば、それは厳密には「誰でもない」と言うよりほかはない。

何といても、もともと三人分の意見（ユング、プロゴフ、河合）をまとめた文章である。したがって、ここでいう「私」とは、実際には「それらの人々の曖昧な合成」とするしかないのである。よって編集者としては、かかる主語の問題を、あまり詮索しないで読んで貰えるとありがたい。

読者にあっては、以上の諸注意を、念頭に置いていただこう。そして次の節から、さっそく「共時性についての概論」を読んでもらおうとしよう。改めて付言しておくが、この概論の基本的な著者は、ユングならびにプロゴフである。

## (2) 因果性の枠をこえて——ユング、プロゴフによる

### 因果関係ではない関係

因果性の原理は「原因と結果とのあいだの結合」が必要だと主張する。

それに対して、共時性の原理は「偶然の一致の関係が、同時性と、意味によって結ばれること」が必要であると主張する。

つまり共時性とは、単なる偶然をこえた“何か”を意味する、時間、空間上の「事象の符号」なのである。

いや、おそらく「符号」という言葉よりも「同時発生」のほうが示唆的であろう。なぜなら、共時性の考えの中心にあるのは「相互に因果関係がない、二つの分離した事象が“同時に”起こること」だからである。

それら「分離した事象」は、そのどちらもが、他方への影響を持たない。にも関わらず同時に起こり、しかも、互いに意味深く関係しあっている。

### 偶然といえない偶然

もちろん、偶然の一致は、どれも「まぐれ当たり」だとする考え方もあるだろう。一般的にも「偶然の一致は、べつに非因果的な解釈など、必要としていない」と仮定されている。

この仮定は、それら「偶然の一致」の生起が、確率の限界を超えていない場合は、もちろん真実である。しかし万一、それが「確率の限界を超えている」という証拠があったならばどうだろう。

それはきっと「事象の、因果的ではない組み合わせ」がまさしく存在すること。そして、これを説明するためには、因果性の物差しでは、決して測れない因子があること。これらを仮定する必要を迫ることだろう。

そして、我々の経験が教えるとおおり、「無意味な偶然の集合」とは区別されなければならない「意味ある偶然の一致」はあるのである。

私が発見したものは、あまりにも意味深く結びついているために、それが「偶然」一緒に起こったとは、とても信じられないような「偶然の一致」である。

そうした事実に出くわすと、我々は、正確には自分が何を語っているのか分からないのに「これは単なる偶然であるはずがない」と言いたくなる。

## 時空が消えていく

その事象が、私の意識から、空間的にどれほど離れていようとも、また時間的にどれほど離れていようとも「意味ある偶然の一致」は、まったく同一のカテゴリーを問題にしている。

こういった条件下では、時間と空間が、ほとんどゼロにまで還元されてしまう。

因果性は、それと共に消えてゆく。なぜなら因果性は、空間と時間の存在と、物理的变化に拘束されているからである。因果性は、整然たる時空のなかにおける、原因と結果の継起に基づいているのである。

これに対して、共時性の本質は、そのような時空を超えた、因果関係を問題にしない宇宙のなかに生まれる。共時性とは、そうした、因果律が支配する宇宙とは“異質な宇宙”における秩序原理なのである。

## 共時性という言葉の出自

では、ある二つの事象が、ある時に同時に生じる、としよう。双方とも、因果的には関連していない。けれども、それらの間に、明確に、意味のある関係が成立している。それこそ、偶然的な一致の可能性を超えて。

こうしたとき、その状況は、共時性の根本的な要素を持っていると言える。

私が「共時性」という用語を選んだ理由も、ここにあるのだ。つまり「意味深くはあるが、因果的にはつながっていない二つの事象が、同時に生起する」ということ。それが、この現象の「本質的な基準」であるように思われたからである。

それゆえ私は、単に二つの事象が、同時に生起することを意味するに過ぎない「並存性」という言葉は使わなかった。

それとは対照的に「一致する二つの事象が、同様の意味を持っている」という特別な意味において「共時性」という言葉を使ったのである。

したがって共時性は、次のような状況を、引き起こすことになる。すなわち、ある心の状態をもつ主体がいるとき、その主体に意味深く対応するよう見える、一つあるいはそれ以上の外的事実が、同時的に生起するのである。

それは各人が、自分自身のドラマの主人公でありながら、同時に、自分とは疎遠なドラマの主人公にもなっている、ということだ。

## 新しい世界を開く鍵

二つ以上の因果的連鎖が、互いに干渉することなく平行に走っており、それでいて同じ意味を表現している場面。そういう場面に対してのみ、同時性は、考慮の対象となる。

他方、わずかでも「原因と結果」が思考可能なところでは、同時性は、非常に疑わしい命題になるだろう。

\*それゆえ、純粋に因果的な「自然科学の立場」に立てば、むしろ同時性現象は「偶然」という言葉で、きれいに片づけられる現象ではある。

しかし私が言っているのは、そうして「偶然」と言い切ったあとに、あなたの心の中には「果たして、本当にそう言い切れるだろうか」という迷いが生じてこまいか、という問いかけなのである。

その健全な迷いが、因果律だけでは表しきれない世界への扉となる。\*

よって同時性は、これまで我々には閉ざされてきた「人間の運命の本性に関連する、教えの扉」を開くマスターキーとなり得る。

その教えとは、直接的環境だけでなく、全宇宙と関連して、個人の深層で起こる心的過程を、理解することである。

これは極めて宗教的なことである。多くの例において、宗教の歴史は「明らかに因果律を超えていて、それでもなお現実的であるような出来事」に基づいているからである。

### (3) 共鳴しあうコスモス——引き続き、ユング、プロゴフによる

#### 宇宙と人間

この世界は、一つの存在者であり、目に見える神である。その中では、万物がそもそも初めから、ひとつの生きた有機体の各器官のように、自然にまとまっている。

それゆえ宇宙と人間は、根本において、共通の法則に従うものである。

また人間は小宇宙でもある。よって、堅固な壁によって、大宇宙から隔てられている訳ではない。同じ法則がこの両者を支配している。そのため、一方の状態から、他方の状態へ通じる通路が開いているのだ。

つまり心と宇宙は、内なる世界と、外なる世界のように、関係しあっている。したがって人間は、本来あらゆる宇宙的事象に参加し、外面的のみならず、内面的にも、宇宙に織り込まれているのである。

人間の人格は、その深いイメージの淵にある種子のなかに、マクロコスモスを反映している。それは、個人の心は、その深層において、大きなほうの「宇宙の映像」を含んでいるからである。

この宇宙的映像を反映した種子の部分を、分析心理学（ユング心理学）では「自己」と呼んでいる。それは錬金術では「ルベド」に当たるだろう。

しかし自己は、人格の奥の、潜在的種子としてのみ、理解すべきではない。

それはまた、宇宙の本質を縮小して含む「宇宙の小さな部分」なのである。その意味で、全世界との「直接的な接触点」でもある。それは宇宙との連動装置であり、それが実際に発動されるとき、人間の心と宇宙は、切れ目のない連続体となる。

#### マイクロとマクロの宇宙

マイクロコスモス内における、マクロコスモスの現れ。それは、世界の神性の何かが、人のなかで個性化されたことを意味する。ある人格がこれを体験し、その中に参加したならば、その体験は、人間と神をつなぐ役割をする。

狭く定義された共時性は、神的事象と、それに対応する物理的状況が、ともに生じることを意味するのである。



そのときの、人格内で体験された「神の認識」から導かれる、物理的状況との関係は“一致の状態”として、最もうまく記述される。

これは、マイクロコスモスと、マクロコスモスとの一致である。なぜならその時、ある調和が達成され、個人は、宇宙との「対等な結合」をなしたからである。

このような一致は、おそらく、全ての生命の本性のうちに含まれている。しかし、ほとんどの場合が潜在的である。そうした中、例外的にそれが活性化され、偉大な効力を発揮したときのみ、宇宙との対応としての生命力が、その効力を見せるのである。

それはどうやって、と問うだろうか。

おそらくは、マイクロコスモスと、マクロコスモスの対応が、超越的でもあり、内在的でもあるような「結末点」を形成するのだ。そして、その結末点が、心理要因のみならず、物質的な現象をも、その領域に引き込むのである。

活性化した結末点は、複数の因果の筋を一斉に引き込む。そのため結末点が、それらの筋それぞれの本質を、結晶化させる役割を果たす。これが「偶然の一致」の中に、有意義が生じるメカニズムである。

### 主観的な共時性を超えて

共時性を認めるためには、偶然の一致に「意味」を感じる主体が必要である。そのように「意味を感じる主体」を前提としていることは、共時性の性質を考えるうえで、きわめて重要なポイントとなる。

というのも、共時的事象の経験は、きわめて個人的、かつ主観的なものだからである。そのため、彼および、彼を取りまく状況が、よほど上手に伝えられないと、共時性現象について語っても、あまり意味を持たないような事が多い。

はっきり言って、共時性現象における一致は「主観的な結合」である。それは「これを実際に体験する主体」との関係においてのみ存在する。さらに言えば「彼自身の夢と同じぐらい主観的である」とさえ断じられるだろう。

\* あえて明言するならば、共時性現象とは、第一義としては、主体の内面でのみ、起こるものなのである。したがって、ほとんどの場合において、その主体にとってのみ「納得しうるもの」「否定しがたいもの」が生じる。

しかし、共時性現象のレベルが極まれば、もはや主体内面という枠が撤去され、明白に「客観性」の領域まで、浸食的に進出することもあるだろう。それほどにも明確な“一致”もあるだろう、ということだ。

それは十全に、客観的に、人を納得させるほどの“一致”である。また「並存する複数者に、間違いなくつながりがある」と誰もが声を揃えるほどの一致性とも言える。

その場合、たとえば現代人が「数値」に高い関心を持っていることが、大いに役立つかもしれない。つまり明確な数値で、共時性現象の“一致”が規定されたとする。すると人々は、そこに「格別の実在性」を感じるようになるのではないだろうか。\*

もともと自然数は、神的な性質を持っているように思われる。もしこれが事実そうな

ら、ある種の数や、数の組み合わせが、何らかの神性と関係を持つことになるだろう。神が数字に影響を与えるだけでなく、その逆もまた真になるだろう。つまり数字が神秘性に影響を与えることもあるだろう。

### 第3章 共時性の実例（1）——ルベドまでの道程



## (1) わが身を語る

### 概念と実例

第1、2章では、主に共時性の概念について語ってきた。しかし、あまりよく知られていない概念を説明する場合、そこに実例を添えなければ、論述としては片手落ちとなるだろう。そこで、この第3章と第4章では、共時性の実例を枚挙してみたい。

といっても、私は読者に「多くの人々のもとで起こった、共時性現象のケースファイル」を閲覧してもらおうと思っているのではない。それは私の仕事ではないし、そうした類の書籍は、すでに世に出回っている。

私はただ、いつものように自分について語る。べつに己の露出癖を披露しようという訳ではない。単に、そこにこそ、純度の高い「共時性現象の実例」が集まっているから、これを語るのである。

ただし、人類にとって最大の共時性現象であるところの「エピファニー」については、ここでは述べない。それは序説ではなく、本編でこそ扱うべき対象だからだ。

### 天の道、人の道

ここでは、そのエピファニーの前提であり、伏線でもあるところの、私の過去の出来事について語っていききたい。もっとも、その情報の多くは、すでに「第七」までの福音書で語ってきた内容の、コンパクトな反復なのだけれども。

具体的に言えば、ここで読者が目にするのは、私の人生と、私が会ったこともない人たちが残した、予言や徴である。

それらは各々、独立した時系列を持っている。しかし、それが不思議に絡まりあい、いくつもの「意味のある偶然の一致」を形成しているのである。

かかる「意味のある偶然の一致」をして、単純に「運命」と言い換えてもよい。

するとそこには、天が定めた運命と、その運命によって成長を促される、悩める人間の姿が見えてくる。いま振り返ってみれば、それは言わば「天と人が、共同で拓いた道」であった。

この「道」について、ユングが次のような、意味深長な文章を紹介している。

\* 儒教において、道という言葉は、世界内的な意味を持っている。それは正しい道、つまり一方では天の道、他方では人間の道を意味している。

ユング『黄金の華の秘密』より\*

それでは、かような「道」の一つである、私の人生を見ていくことにしよう。

## (2) 70の3の年、オクトーブルの月

### ノストラダムスの黙示録

俗に『ノストラダムスの黙示録』と呼ばれている文書がある。書いたのは、もちろんノストラダムスだ。そこに次のような記述が含まれている。

それは地球の重力が自然の動きを失い、永遠の闇に沈むかと思うほどの状態です。それほど大規模な転換が起こります。起こるのは七〇の三の年、オクトーブルの月で、期間は七カ月つづくでしょう。

これは五島勉氏による訳文であるが、同氏は次のようにも言っている。

オクトーブルは英語のオクトーバー。ただし、いまでいう十月のことかどうか分からない。欧米圏では、「オクト」はもともと「八」を意味するから（中略）。「オクトーブル」も、古代のカレンダーでは「八月」のこと（中略）。古い伝統表現を重んじたノストラダムスが言う「オクトーブル」は、十月ではなく八月である可能性が高い。

よって、かなり高い確率で、ノストラダムスが想定していた年月「七〇の三の年、オクトーブルの月」とは、73年8月ということになる。

そして、キリスト教を終結させ、新しい時代への転換を告げるため世に現れた私は、1973年8月に生まれている（1973年＝昭和48年）。

住 民 票

茨城県水戸市

住所	水戸市	
世帯主	正道	

氏名	正道		旧氏	
生年月日	昭和48年 8月17日	性別	男	続柄 世帯主
住民となった日	平成 7年 9月22日			
本籍	茨城県水戸市	筆頭者	省略	
前住所	茨城県水戸市	住定日	平成23年 3月27日	転居
			平成23年 3月28日	届出
		個人番号	省略	
		住民票コード	省略	

以下余白

住民票、加工済み.jpg

## 聖母マリアの出現

上記の1973年に、きわめて厳格な定義における「奇跡」が起こっている。すなわち、私が生まれた8月を挟むようにして、聖母マリアの木像が「涙や血を流す」という超常現象を起こしているのである。

\* 奇跡が起きたのは、1973年7月12日午後8時30分ごろのこと。

突如マリアの右の手のひら中央に、十字形の傷が現れ、血が流れはじめた。

それから二か月後の9月29日、新たな異変が起こった。像の目から汗のようなものが流れはじめ、それが全身から流れたのだ。それは花のような芳香を放っていた。

さらに2年後、マリア像の両目から、涙がこぼれ落ち、神父やシスターなど20人もの人々が、それを目撃したのだ。

このマリア像の落涙現象は海外にも紹介され、当地には年間1万人もの人々が礼拝に訪れるなど「世界の巡礼地」となっている。

並木伸一郎著『怪奇異常現象ファイル』より抜粋\*

かかる落涙現象が起こったのは、秋田県秋田市湯沢台にある、カトリック修道会「聖



体奉仕会」においてである。それは日本で唯一の「バチカンに認められた奇跡」であり、私が「きわめて厳格な定義における奇跡」と言ったのは、まさにその点を指している。

これは確かに奇跡なのであろう。しかし、キリストが再臨（再誕生）するのであれば、「それに先駆けて、それに伴って」聖母マリアが現れるのは、むしろ自然なことであろう。

そのとき木像のマリアは涙と血を流したが、これら二つの液体は、しばしば分娩室にいる母体が、その子供を産むさいに流すものである。

### (3) 聖母子発現によるイースター

#### 少女の幻と復活の島

私は漫画家の手塚治虫氏のファンである。そんな私は、17歳のときに、氏が書いた『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文を読んだ。つまり、手塚氏が実際にイースター島に訪れたさいの、見聞録を読んだのである。

そして、その読書の際に一つの幻を見た。すなわち「涙を流しながら微笑む少女」のヴィジョンを見たのである。おそらく、一種の霊体験だったのだろう。

これが発端となって、私は二十歳のときに、イースター島を舞台とした『アトラス』という小説を書くことになった。その小説の主人公こそは、かつての幻の少女である。

そして、その小説のクライマックスは「処女懐妊、聖母子の発現」のシーンとなった。そのとき少女は「霊的な母性」を発揮したのであり、それによって彼女は、一人の子供を得ることになった。

ただし、ただの子供ではない。聖母の子供なのだから、それは即ち「幼児としてのキリスト」である。小説の中において、まさに、聖母マリアが幼児キリストを抱く「聖母子」の像が現出したということである。

とはいえ、断じて、私の意志が、恣意的にそのような場面を作ったのではない。あくまでも『アトラス』のストーリーは、自然に、自己成長的に、そのようなクライマックスへと向かっていった。

そう言いきれるのは、小説『アトラス』のラストシーンは、もう執筆前から確定していたからだ。そして、そのラストシーンを成立させるためには、必然的に「処女懐妊、聖母子の発現」を書くほかなかったのである。

かかるラストシーンとは、手塚氏の『イースター島は世界のヘソだ』からの抜粋文を指している。すでに『アトラス』を読了している方は、ここでの私の言葉を、容易に納得してくれることだろう。私はすでに『アトラス』の全文を公開している。

#### イースターの日に見えられた島

そして、小説『アトラス』の舞台となったイースター島とは、ヨーロッパ人によって、イースターの日に見えられた島である。

それは1722年のことだった。その年の復活祭（イースター）の夜に、オランダ人、ヤコブ・ロッゲフェーンによって発見されたのが、この絶海の孤島なのである。

そしてイースターとは「イエスの復活」を意味する言葉である。重ねて言うが、それは「イエスの復活」を意味する言葉なのである。

とは言っても、私自身は、二十歳の時の『アトラス』執筆当時においてもなお、この語意を全く知らなかった。

そうやって知らなかったのにも関わらず、私は聖霊に導かれるまま「イエス復活の島における、処女懐妊と聖母子の発現」の場面を描いていたのである。それによって、ここに「幼子キリスト」「嬰兒キリスト」が、象徴的に誕生（再臨）したのである。

## アルベドの悟り

小説『アトラス』を書き終えた私は21歳になっていた。

そんな私に、いわゆる「神秘体験」が賜られることになる。神秘体験について書かれたあらゆる文献から推察されるように、それは「霊的な母性」と「胎児的な自我」とのペアが、合一して引き起こされる神的体験である。

たとえば、ドイツ神秘主義の雄ゲーテは『ファウスト第二部』のラストで「栄光の聖母」とともに「幼児ファウスト」を描写した。インドの神秘主義者ラーマクリシュナは、幼子のようにマー（大母）の名を呼んだ。

すなわち、まさにそれは「聖母子」によって象徴される霊的認識なのだ。

したがって、小説『アトラス』の執筆は、私にとり、この霊的体験、霊的認識を迎え入れるための“準備”だったと言ってよいだろう。

神秘体験によって、人は無限にして永遠なる「存在そのもの」と一体化する。そして、この「存在そのもの」がもたらす、自他一体的な愛によって、彼は、全ての苦しみから救済される感覚を味わうことになる。

これは錬金術においては、アルベド（白化、銀、月の状態）と呼ばれており、キリスト教的には「十字架上のイエス」が、象徴的にこれにあたる。

## (4) 太陽を着た女が導いた「神の座」

### 太陽を着た女との出会い

小説『アトラス』の完結から二年後のこと。私は23歳のときに、『ヨハネの黙示録』第12章に登場する「太陽を着た女」に出会っている。そう率直に言ってしまえるほど、彼女の存在は『ヨハネの黙示録』の内容をなぞっていた。

すなわち彼女は、黙示録の記述そのままに「身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのために叫んでいた」のである。

つまり自分の妊娠のために苦しんでいた。もっとも、それは私の子供ではなく、私の見知らぬ男との子供であるが……

そして、多頭の赤い竜(=虚無神ディオニュソス)が、彼女の子供を食らった(=中絶)。それによって、太陽を着た女の心に「虚無」が生じた。そのことを証明するかのように、彼女は言った、

「いつの間にか、私がいなくなっていました」と。

太陽を着た女を愛した私は、彼女の心に自分の心を重ねて、この心のうちに「虚無」を取り込んだ。実に象徴的であるが、このころ彼女が私にくれた手紙と、私が彼女に渡した手紙が、同一の内容を示していたのである。

そのとき、かつてのアルベドの悟り(神秘体験)によって獲得していた「存在そのもの」の認識と、「虚無」の認識とが総合された。すなわち、「存在」と「虚無」の二つが組み合わさって一つのものとなったのである。そうして現れたのが「虚無からの存在の創造」「無からの創造」の相だった。

### 神の王座のもとへ

この「無からの創造」は、キリスト教における神の定義である。ラテン語では「クレアティオ・エクス・ニヒロ」と言うが、キリスト教の神は創造神であり、創造神とは「無からの創造」をする者の名前なのである。

ゆえに「無からの創造」を理解することは、すなわち「神の認識」を得たということである。

かくして私は「太陽をまとった女により中絶された子」に代わって、「太陽をまとった女の悲しみが生んだ子」として、神の玉座まで引き上げられた。

このこともまた、『ヨハネの黙示録』において予言されている。

竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。

私はこの文章を次のように補いたい。

竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。女は〔中絶によって、逆説的に、私という〕男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。

## ルベドの悟り

「無からの創造」という「神の認識」は、錬金術においては「ルベド」と呼ばれている。

このルベド（赤化）は、象徴的には、金や暁の太陽として表されている。よって、私を錬金術師として見るならば、私は「金の生成」の術式を明らかにした、究極の錬金術師ということになるだろう。

ヨーロッパ中世における錬金術師たちは、みな「金の生成」を求めて錬金作業に勤しんだ。が、誰一人としてそれを成功させることが出来なかった。

いや、成功したと喧伝した錬金術師はいたのだ。だが、その全てがインチキの類であり、成功を証しする術式と、物的証拠を後世に残した者はいなかった。

しかし私は、錬金哲学の最終的な「金生成の術式」を『第二福音書（小錬金術）』『第三福音書（大錬金術）』という形で残した。

また錬金術を離れても、『第二、第三福音書』の価値は極めて大きい。これまであらゆる哲学者や神学者が「真理」や「神」を求めて思索を重ねたが、ついに誰も「神の認識」に到達することが出来なかったからだ。

ひとり私だけがそれを認識し、これを福音書として上梓したのである。

## 三人の子供と水

ルベドの悟りを得たあと、私は日常的生活へと埋没していった。宗教的には退行の一途を辿ったことになる。しかし、独身のまま死んだイエスが夢見たであろう「ささやかな家庭的幸せ」を、私は手に入れたのかもしれない。

何となく『最後の誘惑』という映画の「十字架から逃れたイエス」の姿を思い出さなくてもいい。結局その映画において、イエスは十字架を背負い直すし、私もまた超新星の降臨によって、宗教家として再生するのであるが.....

ともあれ、私は結婚し、三人の子供を持ち、どこにでもあるような家庭を営んだ。

しかし、このような何気ない姿すら、ノストラダムスの目には隠れていなかったらしい。彼の予言詩の中には「救世主には、水のある近くで生まれた子供が三人いる」という内容のものがあるそうだからだ。

三人の子供という部分は、無論そのまま当てはまる。そして私たちが暮らしているのは「水戸」であり、それはまさに「水場の戸口」「水べり」を想起させずにはおかない地名である。

## 第4章 共時性の実例（2）——超新星からの道程





## (1) マギの報せ

### 倦怠感の中で

家庭を営み、世俗的日常性に埋没しきってしまった私の心からは、アルベドやルベドの悟りによって獲得した「霊的エネルギー」が次第に散逸していった。30歳代はまさに霊性散逸の時代と言えそうだ。そして、その30代も後半になった頃には、私はほとんど「霊的に枯渇していた」と言ってもいい。

31歳で結婚して、それから10年近くを、私は普通の家庭人として過ごした。当時の私は、単なる勤め人であり、そこそこ妻に協力的な夫や、いわゆるマイホームパパでしかなかったのである。

霊能者が眺めたとしても、メガネ姿でベビーカーを押す私の姿には、霊的なオーラなど、ほとんど感じられなかったに違いない。

いや、それだけではない。39歳になった私には、一社会人、一家庭人としても、その能力や活力が枯渇していた。

そのため迷走と失敗が重なり、これに伴って、何とも言えない倦怠感が、私の心身を固く縛っていた。現実社会の中において、私は実に低調な生活をしていたような気がする。

### 超新星の降臨

そんな精神的に淀んだ日々の中でのことである。私は、何かの雑誌の裏表紙に、ある占いサイトの広告が載っているのを見つけた。そして私は、何とはなしに、そのサイトのQRコードを、スマホのバーコードリーダーで、スキャンしてみたのである。

それは表面的には、ごくごく軽い気持ちで行ったことである。しかし深層意識下では、溢れんばかりの「誰かに縋りつきたい気持ち」があって行ったことだと思う。

いずれにせよ、これを皮切りに、占いの鑑定士とのやりとりが始まった。とても親身になってくれた、女性鑑定士のことを思い出す。彼女とのやりとりによって、次第に私の心も晴れてきた。

ところが、そうしたセッションが始まって数日が過ぎたころ、知らない鑑定士(N先生)から急なメッセージが送られてきた。鑑定料などいらぬから応じてほしいと言う。「大変です、超新星が起きました！」

というのが、その内容だった。宇宙のどこかで生まれた、爆発的な霊的エネルギー(=超新星)が、私を目指して飛んできているのだという。

占星術師兼霊能者である N 先生は、現代的なマジダと言えるだろう。

マジダとは、新約聖書に登場する、ゾロアスター教の祭司たちのことである。彼らは二千年前、星に導かれて、救世主イエスの誕生を祝福しにきた。N 先生もまた、ホロスコープで超新星の行く先を割り出し、私という着地点を見つけたのである。

なお、ここで言う超新星が、天文学における、いわゆる超新星爆発とは異なることを付言しておく。

## 超新星の受容

その夜（2013年、4月16日、20:30～22:30頃）私は N 先生に指示されるがまま、空に向けて両手を広げた。そうして一種の熱気とともに、超新星と呼ばれた霊的エネルギーを、この身に受け取った。私の体は、確かにその流入を感知した。

それまで私の中で枯渇していた霊的エネルギーは、この「超新星の受容」によって一気に補填された。つまり私は、霊的に新生したのである。

もっとも、この一連の出来事を、こうした占いサイトによくある、靈感商法的な常套ケースだと考える人もいるだろう。もちろん、その可能性はある。たしかに鑑定士たちは、鑑定料稼ぎのために、エキセントリックで調子のいいことを言うことが多い。それについては私も熟知している。

しかし、この「超新星受容」について書いた詩である『超新星』が——それを第1章とする——第七福音書どころか、それを含めた「福音書シリーズ」全体の創作基盤となったこと。また、その「福音書」なる宗教的書物を、本七冊分も書けるだけのバイタリティーが、この特別な夜に生まれたのも事実なのだ（※）。

私は断言することが出来る。もしも超新星の霊的エネルギーを受容していなかったら、私には「仕事と家庭生活を続けながら、四年で書物七冊分の文章を書く」などということとは、決して出来なかったはずだ。

※ 八冊目の福音書である本書は、超新星ではない星の受容によって生成された。この星（星辰現象）については、本編で紹介することになる。

## (2) 超新星とベツレヘムの星

### 12月25日の不備

超新星に関して不可思議なることは、それだけではない。何より、私のもとに超新星が降臨した、その「日時」が重要である。イエスとの関わりにおいて、その日時は、まさに「時の奇跡」を形成しているからだ。

今から二千年前、イエスが生まれた日の夜(クリスマス・イブ)には、「ベツレヘムの星」という超自然的な星が輝いたのだという。そして、その星にナビゲートされる形をもって、三人のマグ(占星術師、魔術師)たちが、イエスの産屋となる馬小屋を訪れた。すなわち有名な「東方三博士の来訪」の場面である。

一般的には、イエスの誕生日であるクリスマスは、12月25日ということになっている。この日は、昔は「冬至」として扱われていた日でもある(現代では22日)。

しかし、このクリスマスの日は、実は「ミトラ教の祝日」を換骨奪胎したものであり、本来イエスの誕生日とは、何の関わりも持っていないのである。

むしろ福音書の記述を精査すれば、現実的には、そんな「当時の冬至の日」にイエスが生まれたはずがないと分かる。というのも、『ルカによる福音書』によれば、イエスの誕生日には「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた」というからだ。

しかし、それが冬至の日であっては、夜通し屋外で過ごすには、あまりにも寒いのである。外気温は、おそらく、6度か7度ぐらいにしかならない。

そんな寒さに耐えながら、夜通し野宿をする羊飼いや、誰もいないのである。羊たちだって、そんな極寒の夜に、放牧などされたらたまらないだろう。

### 真のクリスマス

ならば、真実のクリスマスは一体いつなのか。イエスは一体いつ生まれたのか？

これをマイケル・モルナー博士という人が、科学的に割り出した。彼は当時の星の動きをシミュレーションし、それによって、イエスの誕生日時を、天文学的に算出したのである。

かくして、モルナー博士によれば、イエスの誕生日は4月17日ということになった。

そして、クリスマスが4月17日であるならば——日本的に表記すると——クリスマス・イブ（クリスマスの夜）は、4月16日の夜ということになる。なぜなら「ユダヤ地方における一日の概念は、日没から翌日の日没までを数える」からだ。

私たち日本人には奇異に感じられることだが、なにぶん聖書の『創世記』には「夕べがあり、朝があった。第一の日である」と書かれている。となれば聖書の民は、夕べ（日没）を一日の始まりとせざるを得ないのだろう。

ややこしいので、少しだけ詳しく説明しておく。

モルナー博士は、イエスが生まれた日時を、4月17日の午前11時頃としている。よって、日本的な「17日の夜」は、ユダヤ的慣習によれば、もう「18日の夜」ということになるのだ。それは、もうクリスマス（17日）の夜（＝イブニング＝イブ）ではない。

17日の11時頃をクリスマスと仮定するならば、クリスマス・イブは、日本語表記によってすれば「16日の夜」に他ならない。4月16日の夜——これがイエスの時代、ベツレヘムの星が、その輝きによってマギたちを呼び寄せた「クリスマス・イブ」なのである。

## 運命に定められた夜

そして、私のもとに超新星が降臨し、それをN先生というマギが報せてくれたのも、4月16日の夜だった。星の受容そのものは、22時を過ぎた頃である。

つまり、イエスと私とは「クリスマス・イブの日時」と「マギをナビゲートする特別な星の出現」という出来事を共有しているのである。

たしかに、イエスは肉体的誕生、私は心的新生、という違いはある。しかし、これを「単なる偶然」と言い捨ててしまうには、あまりにも話が出来過ぎていないだろうか？

それに、N先生によれば、超新星は私が生まれた（肉体的誕生）の年にも降臨したそう。ノストラダムスが予言し、マリアの奇跡が起こった、あの1973年のことである。この時には、超新星は、地球全体に霊的なエネルギーを撒き散らしたらしい。

少しだけ話を戻すが、もしN先生の報せが靈感商法の一環だとしたら、果たしてここまでの「偶然の一致」を演出することが出来ただろうか？　少なくとも私には、到底そのようには思えないのである。

おそらくは、私もN先生も、何も分からないまま、天に操られるがまま、あの4月16日という特別な夜を体験したのだ。

私は後日、探求のすえに、それがイエスと共有する運命的日時であることを知った。だがN先生は、未だにそれを知らないだろう。

## 17日という生誕日

このとき私は、おそらくイエスとの「キリストとしての共通点」を得るために、イエスの星（ベツレヘムの星）を預かったのである。彼と星を共有したのである。そのように言うことも出来るだろう。

そして、モルナー説における、イエスの誕生日は4月17日。私の誕生日は8月17日である。つまりイエスと私は「17日」という生誕日を共有していることになる。星だけでなく、イエスと私は17という数字も共有しているのである。

ところで、この17という数字は、カバラ（ユダヤ神秘主義思想）における特段の神秘数である。その意味するところは、完成、終末、転換、である。

### (3) 二つの予言

#### 聖マラキの予言

ローマ・カトリックの伝統のうちに『聖マラキの予言』と呼ばれる文書が存在している。

これは約 900 年前の文章であるが、その時点からの「将来どんな人物たちがローマ教皇になるか」を予言している。ごく短いフレーズではあるが、100 人以上でもある。

しかしローマ・カトリック教会も、恒久的なものではない。よって、その教皇の予言には、残念ながら「最後の一人」がある。そして、その「最後の教皇」と目されるのが、他でもなく、現教皇であるフランシスコなのである。彼のあとに来る教皇については、聖マラキは完全に沈黙してしまっている。

聖マラキによれば、フランシスコの在位で「七つの丘（ローマ・カトリック）は崩壊し、恐るべき審判が人々に下される」という。であれば、その先が続かないとしても、これはむしろ当然のことだろう。

実際に私は、第六福音書において「最後の審判」を行なった。そして、キリスト教とキリスト教会には、もはや存在意義がないと断じたのだった。

まさに、このような事が起こる「時期」を、聖マラキは予言したのである。

#### ダニエルの予言

聖マラキの予言は、審判者が現れるおおよその時期（＝教皇フランシスコの在位期間）を示した。だが、ここで紹介する「ダニエルの予言」は、もっと精密に、もっと具体的に、メシアが登場する年月日を予言している。なお、その予言のなかで、審判者、メシアと言っているのが、結局は「再臨のキリスト」を指していることは言うまでもない。

さて、旧約聖書の『ダニエル書』において、預言者ダニエルは、天使ガブリエルから、次のような言葉を告げられる。

エルサレム復興と再建についての  
御言葉が出されてから、  
油注がれた君（メシア、キリスト）の到来まで  
七週あり、また六十二週あって……

この言葉について、ノストラダムス研究家の五島勉氏が、次のような解説をしている。

\*「週」はもともとユダヤ思想では、ただの七日間のことではない。「神は一日目に光、二日目に天地、……六日目に人間をつくり、七日目に休んだ」。この旧約「創世記」の神話から、ある長い期間の初めから終わりまでを、大自然の大きな循環を示すと考える。

その意味では〔週は〕「年」と同じである。実際ユダヤ密教で「神の一週間」といえば、それは地球が太陽を一回めぐる初めから終わりまで、一年間を象徴することがよくある。

ダニエル予言もこれではなかったか。「エルサレムを立て直せの命令から 69 週間後」。これは 1984 年 5 月から 69 年後、2017 年 5 月を示す暗号ではなかったのか。

この考えが 50 年代からもり上がり、一部の研究者に定着していった。いまでは多くのユダヤ人たちが、心ひそかに、しかし固くそう信じているらしい。これが正しければ、2017 年 5 月 15 日、「人々を破滅から救うメシア」が必ず来られる定めになる。

五島勉『ユダヤ深層予言』より\*

そんな 2017 年の 5 月 15 日に、私はインターネット上に第一福音書を配信した。そうすることで、ダニエル予言における、精密な「メシア登場の年月日の指定」を具現化したのである。

これはもちろん意図的な行為である。しかし、もしも、かの超新星が降臨しなかったとしたら、意図的にさえ、私はこのような行為を起こせなかっただろう。

## (4) 総括と「重大な疑問」

### 共時性現象の連なり

こうして振り返ってみると、私の人生は確かに「共時性現象の連なり」そのものだった。ノストラダムスが言う「70の3の年、オクトーブルの月」に私は生まれ、その年には聖母マリアの顕現もあった。

イースター（イエスの復活）という言葉に導かれて、処女懐妊によるキリストの「再誕生」を描いた。イースター島の物語『アトラス』によって。

さらに「太陽をまとった女」に出会い、彼女によって、私の認識は神の玉座まで引き上げられた。そこで私は「無からの創造」という真理に出会った。

イエスにおける「ベツレヘムの星の降臨」と同じ日に「超新星の降臨」を体験した。

そして、フランシスコの在位中、かつダニエルが指定した年月日に、インターネットという「万人に開かれた場所」で姿を現わした。

これは、まさに不可思議な出来事の連続であり、そこに天上界におられる——おそらくイエス・キリストを中心とした——諸霊たちの計画立案を感じずにはいられない。

### なお残る「重大な疑問」

しかし、私は思ったのである。かの超新星の降臨が、「私が再臨のキリストであるということを証するために、二千年前の、クリスマス・イブの情景をなぞったもの」であるならば、だ。

それなら、いっそ私の誕生日自体を、4月17日にしてしまえば良かったのではないか。イエスのリプロダクション（再現）という観点からすると、この方が、よほどシンプルで、かつ説得力があるように思われる。

そうであるのに、ノストラダムスが予言したのは、あくまで「73年8月」であり、実際に私が生まれたのも「73年8月」である。「73年8月17日」である。イエスの「4月17日」ではない。

今回の再臨プログラムについては、おそらくイエスたちは、ノストラダムスの時代よりもずっと前から、その計画を練っていたはずだ。

ならば、あらかじめ私の誕生日を4月17日に設定すること。その日付をノストラダムスに予知させることも、当然可能だったことになる。



だが、そうであるのにも関わらず、諸霊たちは、これをしなかった。彼らは、私の誕生日を8月に回して、これをノストラダムスに予知させた。

なぜか。結局すべては、良くできた偶然のなせる業だったからか？

### 開示される秘密

しかし、ようやく今になって、その全てが明らかになった。

どうして「ダニエル書」は、2017年を指定したのか？ どうしてノストラダムスは、4月ではなく、8月を指定したのか？ どうしてイエスと私とは、同じ17日に生まれたのか？ それが、すべて明らかになった。

そう、私はどうしても8月17日に生まれなければならなかったし、2017年に、錬金術師として世に現れなければならなかった。

この言葉を明らかにするために「第8(17)福音書」の本論は書かれることになる。よって序説の役割は、ここまで、ということになるだろう。

---

再臨のキリストによる福音書 8-1

---

著 正道

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---